「彼女は必死で」

築森公彦

佐伯彩花（19）
牧村晴美（19）
黒部進（21）

彩花の部屋。電話鳴る。
彩花「（出て）佐伯です」
晴美「あ、晴美」
彩花「（沈んで）ああ、晴美」
晴美「（笑う）」
彩花「なに」
晴美「よっぽど楽しかったんだ、黒部先輩とのデート」
彩花「デートじゃないって！」
晴美「（笑って）すっごい否定」
彩花「もう最悪。映画もつまんなかったし」
晴美「だから断れって言ったじゃん」
彩花「でも、サークルで毎日顔合わすわけだし、もうすぐ合宿だし…」
晴美「適当に理由つくればよかったのよ。お母さんの看病しなきゃいけないとか、猫にエサやらなきゃ、とかさぁ」
彩花「お母さん超元気。猫だって飼ってないもん」
晴美「なんでもいいじゃん」

彩花「ウソつけないよ、絶対バレる」
晴美「バレていいんだって。そうしないと気づかないよ、嫌がられてるって」
彩花「…」
晴美「黒部先輩、どんどんソノ気んなっちゃうよ」
彩花「困る」
晴美「最近クルマ買ったらしいじゃん。次は絶対ドライブだよ」
彩花「密室だ。ムリ」
晴美「断れんの？」
彩花「断るよ！」
晴美「キッパリ？」
彩花「・・・がんばる！」
晴美「誘われそうになったら速攻話題変えるんだよ」
彩花「あ、キャッチ入った」
晴美「うわっ、黒部先輩じゃん？」
彩花「ええ!? さっき別れたばっかだよ。ありえないって」
晴美「先輩ならありえる」
彩花「大友クンかも・・・」
晴美「大友くん？ ありえんの？」
彩花「昨日、電話くれたんだよ！ 社会学のノート、コピーさせてくれって！」
晴美「へえ～」

彩花「そうだ、受け渡しのことで電話くれたんだ」
晴美「学食じゃダメだよ」
彩花「え？」
晴美「ごはんでも、って誘ってみれば？　デートに持ち込むチャンスじゃない」
彩花「（嬉しそうに）キャッ」
晴美「がんばっ…」
　彩花、晴美が言い終わらないうちにキャッチに切り換え――
彩花「さ、佐伯だけど、ノートのコピー、もういつでも渡せるから！　ついでにゴハンでも…」
声　「ゴハン、いいね」
彩花「え？」
声　「けど、ノートって何？　佐伯となんか授業かぶってたっけ？」
彩花「く、黒部先輩!?」
黒部「イエース、黒部」
彩花「（動揺して）な、なんで…」
黒部「どうしてるかな、と思ってさ。さっきまで一緒だったんだけどさ、へへ・・・」
彩花「（脱力）」
黒部「映画、おもしろかったな。マジおもしろかった」
彩花「あぁ…はい」

黒部「でも俺、分かったね。ブルース・ウィルス絶対死んでると思ったもん。映画館中で俺が一番最初に気づいたね。俺、映画好きじゃん。すげえ数観てるからさ、ダマされないんだよあああいうの。マジだまされねえ」
彩花「すごいですね」
黒部「（突然大声で）ペペロンチーノ、デリ～～～シャス！」
彩花「（驚いて）はっ?!」
黒部「あの店」
彩花「あ、ああ」
黒部「ナイスチョイスでしょ。俺、けっこう店詳しいからさ。マジ詳しい」
彩花「そうなんですか（ウザイ）」
黒部「俺ってグッッッチリ！」
彩花「グ、グッチョリ・・・？」
黒部「グッチリ。グッドでバッチリな時に使う言葉。知ってる？」
彩花「いや、ちょっと…」
黒部「オレが作ったんだ。佐伯も使っていいよ、流行らそうぜ」
彩花「（言葉出ず）」
黒部「いつもはみんな一緒だけど今日は2人っきりだったじゃん。テンション上がるよな、お互い」

彩花「お互い・・・」
黒部「俺ら、けっこう雰囲気出てるし」
彩花「え、なんの（雰囲気）？」
黒部「今度のさ・・・」
彩花「（ヤバイ）えっ」
黒部「日曜にさ・・・」
彩花「（焦って）あっ、あの、お母さんにエサやらなきゃ！」
黒部「え、お母さんにエサ？」
彩花「あ、いえ、お母さんは病気で…」
黒部「うそ、どこが悪いの？」
彩花「え…えーと、が、癌？」
黒部「癌?!　ヤバくない？」
彩花「あ…でもあったかくして寝てれば…」
黒部「治んねえだろ」
彩花「癌にも色々あるみたいんなんですよ～、ハハ…」
黒部「ふうん、じゃ、今度の日曜…」
彩花「（慌てて）あ、あ、私、今、あんまり外出できないんです」
黒部「お母さんは大丈夫なんだろ？」
彩花「え…でも、あの、猫がエサで、じゃなくて…」
黒部「猫飼ってんの？　なに？　アメショ？」
彩花「えーと…」

黒部「俺も猫派。犬より猫。マジ犬より猫」
彩花「・・・」
黒部「で、猫がどうしたって？」
彩花「病気！　原因不明で、つきっきりで看病しないといけなくて…」
黒部「ニャ～～～ニャ～～～」
彩花「え」
黒部「甘えてる時の泣き声。ミャ～～ゴ！　ミャ～～ゴ！」
彩花「（気味悪く）き、切ってもいいですか」
黒部「これ盛りがついてる時。佐伯にゃちょっと刺激強かったかな、へへ」
彩花「（絶句）」
黒部「猫には詳しいんだ。診てやるよ。佐伯んちって…」
彩花「だ、大丈夫です、ちゃんとお医者さんに診せてますから」
黒部「だったら日曜…」
彩花「でも心配で心配で…」
黒部「菅平合宿、行けんのかよ」
彩花「あ、それはなんとか…」
黒部「助手席は佐伯だから」
彩花「は？」
黒部「俺、車出すって言ったろ」

彩花「わ、私は晴美と新幹線で・・・」
黒部「大友も一緒で悪いんだけどさ」
彩花「え!!」
黒部「途中でチェーンつけなきゃだし。多分、渋滞も半端ないから、運転1人じゃキツいんだよな」
彩花「ほんとに大友くんも？」
黒部「アイツのバイト先でチェーン買ったんだけど、かなり安くしてくれてさ。その代わりもあってさ」
彩花「大友くんも乗るんだぁ…」
黒部「佐伯、あんまり大友と話さないよな。俺と2人のが気が楽なら、アイツ乗っけない」
彩花「な、なにいっちゃってんですか！　平気ですよ、平気！　ってかグッチリ！」
黒部「違う違う。グッチリじゃなくてグッッッチリ！（発音を正す）」
彩花「（聞いてない）先輩、何乗ってんでしたっけ？」
黒部「マーチ」
彩花「（嬉しそうに）キャッ、狭そ～」
黒部「助手席だから心配ないって。大友は後ろで荷物に挟まれてキツイだろうけど」
彩花「私、後ろでいいです」
黒部「大友助手席？」
彩花「いや、大友くんも後ろで」

黒部「助手席空いちゃうじゃん」
彩花「荷物、そっちでいいじゃないですか」
黒部「ああ・・・じゃ、あいつ運転させて、俺、後ろいくか」
彩花「先輩に狭い思いさせるの悪いです。私、助手席いきます。先輩は一人で後ろで…」
黒部「あいつ雪降ったら運転ヤバイっつってたな」
彩花「やっぱ先輩の運転が安心ですね。私と大友くんが後ろで狭い思い…キャッ」
黒部「佐伯、助手席でナビやってよ」
彩花「ナビ？」
黒部「俺の車、カーナビついてないからさ」
彩花「道教える役ですか？」
黒部「そ、ドライバーとの共同作業。一心同体」
彩花「い、いっしんどうたい?!」
黒部「ワイフ役」
彩花「ワ、ワイフ?!　じゃあ大友くんに運転してもらいましょう！」
黒部「交替でな」
彩花「ずっと大友くんでいいじゃないですか、で、私がワイフ…キャッ」
黒部「ずっとはキツイって」
彩花「じゃあ私が運転替わります。で、大友クンがワイ

フ！」
黒部「佐伯、免許持ってんの？」
彩花「免許証、ピカピカですよ！」
黒部「ゴールド？」
彩花「ヤダ、私19です」
黒部「取ったばっかかよ」
彩花「大丈夫です！　大友くんと一心同体でがんばります」
黒部「いいよ、俺運転する」
彩花「先輩は後ろで寝てましょう、グッッッスリと！」
黒部「怖くて眠れねえ。マジ眠れねえ」
彩花「もう！　腕前見せます」
黒部「え？」
彩花「マーチ、運転させてください」
黒部「ふ～ん。ま、ドライブがてらいいかもな」
彩花「ドライブ?!」
黒部「じゃ、今度の日曜…」
彩花「（慌てて）あ、あの日曜日はちょっと」
黒部「用事あんの？」
彩花「え、ええ。晴美と約束が」
黒部「じゃ、土曜」
彩花「えっと、その日も晴美と約束あるんですよ」
黒部「じゃ、金曜」

彩花「今週も来週もずっと晴美と…」
黒明「じゃ、明日だな」
彩花「え？」
黒部「あいつ明日デートだろ、本木と」
彩花「（ヤバイ）」
黒部「横浜でも行くか」
彩花「そ、そんな遠くまで行かなくても……」
黒部「俺のナイスセレクトのMD聞かせてやるよ」
彩花「ナ、ナイスセレクトもいらないし、大学の周り、グルッとで・・・」
黒部「高速の運転見たいじゃん」
彩花「え？」
黒部「菅平まで、ずっと高速だぞ」
彩花「あぁ（そっか）」
黒部「中華街にイイ店知ってんだ」
彩花「（ヤバイ）食事は別に…」
黒部「マジ美味いんだって」
彩花「中華ってカロリー高そうだし・・・」
黒部「低カロリーのもん作らせるよ」
彩花「そんな、お店の人に悪いです」
黒部「わがままきくんだよ、大友の叔母さんの店だから」
彩花「（即座に）行きましょう！」
黒部「オッケー。じゃ、明日、３時に校門前」

彩花「了解です」
黒部「楽しみだな、横浜デート」
彩花「デートっ?!」
黒部「マ～ジ楽しみ（切る）」
彩花「・・・マジ最悪・・・」

（終）

「雨やどり」

伴一彦

「……はい」
「あ、ゴメン……寝てた？」
「！　いや、待ってたよ」
「え？」
「電話、ずっと待ってた」
「ホントに!?　嬉しい」
「……」
「もしもし？」
「……俺、お前のことが判らないよ」
「私は……自分でも判りやすいと思う」
「そうかな。俺のこと、からかってるのか、それともただの気紛れな性格なのか、どっちなんだ」
「あなたのこと、からかってもいないし、気紛れでもないわ」
「じゃあ、どういうつもりで俺と付き合ってンだよ」
「好きだから……毎日声を聞きたいし、毎日会いたいし、ずっと一緒にいたい……いっつもそう言ってるじゃない」
「……日によって言うことが違うだろ？」
「そんなことない」
「……」
「ねえ、私ってうっとうしい？」
「？　そんなことないよ」
「電話かけると迷惑？」
「俺はずっと電話を待ってるよ」
「そうね、待ってるだけ。そっちからはかけてくれない」
「したさ、今日だって」
「ウソ、私、ずっと部屋にいたよ」
「留守電にしてただろ？」
「留守電？　私、持ってないわよ」
「何言ってンだよ、俺が誕生日のプレゼントにあげただろ」
「誕生日のプレゼント？」
「ひでエなあ、そりゃ陽子の誕生日祝った男はたくさんいるだろうけどさ、誰からもらったかぐらいは覚えとけよ」
「……」
「もしもし……」
「あのう……田中、さんじゃありませんか？」
「え？」
「……」
「……陽子じゃないの？」
「……違います」
「!?」

「ごめんなさい、私、電話番号、間違えたみたい」
「……参ったな」
「声がすごく似てて……」
「いやあ、キミもそっくりで……すいません、変なこと言って」
「いえ……」
「……」
「……じゃあ」
「あ、もしもし」
「はい？」
「よかったらもう少し話しませんか？」
「……」
「図々しかったですね。失礼しました」
「……雨が降ってますね」
「……夕立みたいですね、雷が鳴って……あ、夜中に夕立っていうのは変ですね」
「……雨が止むまで……」
「え？」
「話してましょうか」
「!?　キミさえよければ……」
「……でも、なんか、変な感じ。いきなり裸を見られたようで……」
「俺もですよ。みっともないなあ……」
「彼女ですか？」
「ええ、まあ。というか、よく判らないんですよ、彼女がどう考えてンのか」
「友だち以上、恋人未満？」
「いや……ちゃんと付き合ってるっていうか、はっきり言うとヤってはいるんだけど、心が掴めないというか……ベタベタ頼ってくる時もあれば、あなたと私はお友だち、みたいな態度を取るし……俺は彼女のつもりなんだけど、彼女は俺を彼氏と思ってない、運転手代わりに使えるアッシーぐらいにしかみてないような気がして」
「へえ……」
「束縛されるのが嫌なんだと思う。でも、好きだったら、相手の行動が気になりますよね、今どこで何をしてるのか、って……」
「ええ、とっても。私もそうなんです。彼、とっても優しくしてくれる時もあれば、ずっとほうっときっぱなしだったり」
「……」
「電話もこっちからかける一方で、向こうからかけて来た時は、今日泊めてくれって、そういうのばっかり」
「付き合ってどれぐらい？」
「まだ一ヶ月ぐらいだけど……」
「そいつ、あなたのこと、本気で好きじゃないような気がする」
「……」
「抱きたい時に抱ける女。そんなふうに思ってるんじゃないかな」
「……」
「あ……言い過ぎだ」

「……判ってるの、それは充分に」
「あなたって、彼を好きだって態度を見せすぎるんじゃないかな。だから男は安心して便利づかいをしてしまう。やっぱり、追えば逃げる、逃げれば追うってもんでしょう」
「……」
「でも、忘れた方がいいと思うな、そんな彼。今日、電話番号間違えたことをいいきっかけにして」
「判ってる、充分判ってる。……でも、好きなの」
「――」
雨の音。
「しかし、俺も言える立場じゃないよなあ」
「そうですね」
「あ、きついなあ」
「女って、好きな人には純情だったり従順にもなったりするけど、好きでもない相手には平気で残酷なことを言ったりしたり出来るんですよね」
「たしかに、あなたも女ですね」
「え？」
「俺が一番傷つくことを言ってくれた」
「あ、ごめんなさい」
「いや、いいんです、その通りですから」
「じゃあ、どうして別れないんですか？」
「でも、好きなんですよね」
「――」
「おんなじセリフ、言っちゃいましたね」
「ええ」
「しかし、どうしていないんでしょうね、自分にピッタリの相手って……」
「ホント。世の中これだけ人がたくさんいるのにね」
「付き合う時は、絶対もうこの人しかいないって思うんだけど……」
「『恋は幻想の子、幻滅の母』って言葉、知ってます？」
「いえ」
「誰の言葉か知らないけど……でも、なかなか幻滅しないんですよね、一度好きになっちゃうと」
「彼は本当はそんな人じゃない……なんて自分に言い聞かせたりして。幻想の中にいる方が楽なんでしょうね、きっと」
「……お互いに、今付き合ってる奴のことは忘れましょう、キッパリと」
「……ええ」
「……」
「……」
「もし、俺とあなたが付き合ってたら、うまくいってたかな」
「……どうかしら」
「よかったら、会いませんか？」
「……」
「会いたい」
「……」
「もしもし」

「……雨がやんだ」
「……」
「……電話、切らなきゃ」
「ちょっと待って」
「切らなきゃ……」
「だったらもう一度、電話」
「どういうふうに電話番号間違えたか覚えてない」
「教えるよ。いや、こっちからかける。教えて……」
「やめましょう。雨がやむまでって決めたから……」
「こっちはまだ降ってる」
「……通り雨だったのね」
「え？」
「……雲の合間から月が見えてる」
「今、窓、開けた。……ね、聞こえるだろ？　雨の音」
「……悲しい音ね」
「……」
「心が空っぽだから響くのよね」
「……傘がほしいんだ」
「私は、思いっきり濡れていたい」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……どうしたの？」
「……雨がやんだ。こっちも……」
「……」
「……」
「じゃあ」
「……じゃあ」
「……」
「あの……」
「え？」
「名前……」
「……」
「いや、やっぱり聞くの、やめる」
「……ウン」
「また、何かの偶然で二人の部屋の電話がつながるまで……」
「そうね」
「じゃあ、また」
「ウン……また」

「夫婦漫才」

田中孝治

登場人物
北野　太平（３８）
北野　圭子（３５）

太平、市役所内の公衆電話から――。
圭子、自宅で携帯電話で――。
太平「あの、その携帯の持ち主なんですけど……」
圭子「（呆れて）私だけど」
太平「えっ？　（大袈裟に）あっ、圭子か!?」
圭子「わざと忘れたんでしょ、携帯」
大平「（一瞬絶句するが）何言ってンだよ、良かった～、家に忘れてたのか」
圭子「もう、あんたの家じゃないわ」
太平「……」
圭子「（ため息まじりに）ペーペーだったあんたが転がり込んで来て……（考え）13年……（呆れて）よくもまあ、13年も」
太平「ほんと、長らくお世話になりました……って、オイ！」
圭子「（ウンザリと）……なによ」
太平「それが夫に対して言う言葉か」
圭子「（強調して）元・夫でしょ！」

太平「（強調して）まだ夫だ！」
圭子「出したんでしょ、アレ」
太平「窓口がすげえ混んでんだよ」
圭子「まさか」
太平「並んでるんだよ、ほら、あの時みたいに。二人で観た映画のえ～と、何だっけ？　千と……千と……千と」
圭子「デリカットの物語？」
太平「そうそう、メガネで目ン玉がビヨ～ンって、違うよ！　そんなの観たくないし。あれだよ、あれ、あの大ヒットした、千と……千と……」
圭子「千とハリーポッターの神隠し！」
太平「そうじゃなくて！　そんなのヒットしすぎるし！あれだよ、『あ～、あ～』とかいう奴が出てくるアニメのさあ、千と……」
圭子「ああ、千昌夫の所得隠し！」
太平「あ～、ちゃんと申告しとけば良かったあ、ってノンフィクションかよ、オイ！……（しみじみと）いいなあ～」
圭子「何が？」
太平「間だよ、間。絶妙だよ。やっぱ、愛し合ってる証拠だな」
圭子「愛し合ってる？」
太平「海よりも深く、空よりも高く！」

圭子「そして、星屑のように散った」
太平「そう、こっぱみじんに、ってオイ！」
圭子「（呆れて）一生やってろ」
太平「……なあ、やっぱ良くねえよ、離婚なんて」
圭子「なによ、今更」
太平「俺たち夫婦漫才だぞ」
圭子「唄子・啓介師匠も離婚した。正児敏江・玲児師匠も離婚した」
太平「大助・花子師匠は仲良くやってるじゃないか。俺たちも離婚はやめてさ……」
圭子「コンビもやめる」
太平「え？」
圭子「離婚してコンビ解消よ」
太平「（ア然）冗談じゃないぞ」
圭子「どんな顔して舞台に上がるつもり？」
太平「離婚ネタにすりゃいいだろ」
圭子「家追い出されたこと、ネタにするの？」
太平「ああ」
圭子「自分の弟子に女房寝取られたことも？」
太平「――（絶句）」
圭子「出来ないでしょ？　笑えないものね」
太平「……キツイ」
圭子「私のウリでしょ？　毒舌が」

太平「……」
圭子「（ため息で）……ホントはこんな女じゃなかった。あんたのせいでこうなったのよ」
太平「おかげって言えよ。ＮＨＫ演芸新人賞だって取ったんだぞ」
圭子「あの賞がいけなかったのよ」
太平「芸人として認められたんじゃないか」
圭子「そのかわり私は女じゃなくなった」
太平「あ？」
圭子「私は賞より子供が欲しかったの」
太平「……」
圭子「けど、あんたは嫌がった。妊娠したら舞台を休まなきゃいけないから」
太平「当たり前だろ、やっと仕事が増え始めたんだぞ」
圭子「ヒマな時期はいくらだってあったでしょ」
太平「よし、今から作ろう。それでやり直そう、『北野太平・圭子』を。なっ、圭子」
圭子「判ってない」
太平「え？」
圭子「私がやり直したいのは『北野太平・圭子』じゃない。ただの夫婦なの」
太平「俺だって……」
圭子「あんたが欲しいのは妻じゃない、相方の私」

太平「女房のお前が欲しいんだよ」
圭子「だったら漫才やめて」
太平「――」
圭子「どうして黙るの？　口癖だったじゃない『芸人は黙ったらお終い』って」
太平「俺はツッコミだぞ。ボケのお前にツッコまれたら喋れねえんだよ。それとも何か？　この離婚話が全部ボケで、俺が『よしなさい！』ってツッコめば、離婚をやめるのか？　そういうオチなのか？」
圭子「このネタは、あんたが離婚届を出してオチるの」
太平「警察に届け出したよ」
圭子「はぁ？」
太平「離婚届の紛失届。今探してもらってる」
圭子「（ウンザリ）ウソはもうたくさん。最初っからそうよ。相方に逃げられた、隣に立ってるだけでいいから、って私を舞台に引っ張り上げたのよ。普通、素人の彼女を舞台に上げる？」
太平「お前、緊張してガタガタ震えてたよな」
圭子「一回だけって言ったくせに、舞台終わったらボケの特訓」
太平「お前の才能に惚れたんだ」
圭子「才能なんかないわ」
太平「あるからここまでやってこれたんだろ」

圭子「……私はあんたに褒められたい一心で頑張ってきたの」
太平「……」
圭子「……デートって普通は映画とか遊園地でしょ？　でも私は寄席とか演芸場ばっかり。家にいる時だって『やすきよ』のビデオ」
太平「楽しかったじゃないか」
圭子「あんたはいつもそう、漫才のことしか考えてない。でも、私のフリには気付かない」
太平「あ？　ちゃんとボケてたぞ」
圭子「……もっと私を見て。そうフッてたのよ」
太平「──」
圭子「一度だって気付かない。一番肝心な私のフリに……」
太平「……」
圭子「言ったことある？　私の料理食べて『おいしい』って」
太平「……」
圭子「一度だってないでしょ？　あんたがおいしいと思うのはボケだけ。『そのボケ、おいしいな！』」
太平「……」
圭子「でも……彼はちゃんと言ってくれるの。私の料理食べて、『おいしい』って」

太平「……タケシか」
圭子「女喜ばすのはお客喜ばすより簡単なのよ」
太平「……」
圭子「あんたは芸人としては一流だけど、男としては二流よ」
太平「キツイなぁ」
圭子「だから、毒舌がウリでしょ」
太平「（卑下して）な、やり直そ。な、圭子、頼むから見捨てないでくれよ」
圭子「みっともないこと言わないで」
太平「ああ、みっともないさ。弟子に女房を寝取られたみっともない男だ。お前とヨリ戻せるんならなんでもする。裸にだってなる。ケツの穴だって見せてやる」
圭子「……それ、芸人が笑いを取るためにやることでしょ？」
太平「タケシにお前の相方なんかつとまんねえよ！」
圭子「やっぱり漫才のためじゃない」
太平「違う！」
圭子「そうじゃない、相方なんて……」
太平「使い慣れてるから出ただけだ。旦那って言えばいいか？　パートナーか？　ベターハーフか？」
圭子「それを言うならニューハーフ（と思わず）」
太平「（も思わず）おっ、ナイスボケ！」

圭子「――」
太平「（嬉しくて）じゃあ、ダーリンはどうだ？　それとも亭主か？　連れ合いか？」
圭子「――」
太平「だったら、ハズバンドで……」
圭子「（遮り）もうやめて。私……もうボケないよ」
太平「（真顔で）……判った。俺、漫才やめる」
圭子「え？」
太平「漫才やめて、お前とやり直す」
圭子「ウソよ、あんたが……」
太平「（遮り）やめる！　漫才とはキッパリ縁を切る。お前さえいてくれたら何もいらない。お前より大切なものなんかあるかよ！」
圭子「……」
太平「圭子、もう一回やり直そう！」
圭子「……」
太平「（必死に）俺がお前を幸せにするから！」
圭子「……」
太平「……」
圭子「……その言葉、もっと前に聞きたかった」
太平「今からでも……」
圭子「……赤ちゃんができたの」
太平「！」

圭子「……だからこれからはタケシと生きて行く」
太平「――」
　ピンポーンとドアチャイムが鳴る。
太平「……タケシか？」
圭子「……ごめん。もう切る」
太平「……そこで暮らすのか？」
圭子「あんたが教えたの？　転がり込み方」
太平「……出て行き方は教えてねえぞ」
圭子「良かった」
太平「俺も知らねえんだ。だから……」
圭子「（首を振り）マキが入ってるわ」
太平「――」
圭子「オチの時間よ」
太平「（泣きそう）オトせねえよ」
圭子「マキが入ったら5秒でオトせるって言ってなかった？」
太平「……」
　ピンポーンともう一度ドアチャイムが鳴る。
圭子「（ドア外に）ちょっと待って！」
太平「！　待ってるよ」
圭子「あのね……」
太平「（足掻いて）携帯！　その携帯持ってきてくれるんだろ!?」

圭子「……」
太平「――。っていうか、本当はお前もやり直したいんだろ。なっ、そうだろ、圭子。よし、『北野太平・圭子』の復活だ！　今からそっち行く。いいネタ思いついたんだよ。お前のボケが活かせる凄げえいいネタなんだよ！　明日の舞台で……」
　電話からは無機的な「ツー、ツー、ツー」という信号音が流れている。
太平「おい、どうしたんだよ、圭子。ツーツーって、変な声出して。新しいギャクか？　だったら、俺もツッコミ方考えないと、って、切れてるよ、オイ！」
　信号音。
　太平、ため息で電話を切る。
太平「……結婚届、二人で出しに来たよな。窓口のおじさんに名前確かめられて、『どうもー、北野太平（圭子の真似で）圭子でーす』って声を揃えて……ウケたよな。（窓口に向かいながら）……今日も聞かれたらどうすンだよ。何て言えばいいンだよ。……こう言ってやるか。『ええ、そうです。北野太平・圭子が離婚する時がキタノ』って。おっ、いいねえ、やれば出来んじゃん。っていうか、もう５秒過ぎてるよ、オイ！」
　静寂。
太平「……なにが５秒でオトせるだよ……オチねえんだ

よ、一人じゃオトせないんだよ。お前がいないと……お前がいないとさ……」

太平の目から涙が零れる。

（おわり）

「次の次」

伴一彦

「……」
「……」
「……」
「……」
「……もう寝る」
「……」
「それじゃ……」
「ウン」
「切るね」
「ウン」
「切るよ」
「ウン」
「なんでウンしか言わないの」
「……」
「じゃあね、お休み」
「ウン」
「お休みも言えないの、この人」
「ウン」
「なんで」
「なんでも」
「なんで？」
「……」
「もう疲れちゃった、どっと」

「……」
「お休みって言ってよ、早く」
「判った」
「お休み、じゃあね」
「……」
「じゃあね、元気でね」
「……元気だよ」
「そお？　じゃ、元気でね」
「……」
「……」
「……」
「テツが悪いんだからね」
「……」
「テツがみんな悪いんだから。テツのせいだからね」
「……俺が悪いのは判ってるっての」
「……もういいの？」
「……」
「……このままじゃ終わるよ」
「……」
「……じゃあ、どうすンの？」
「……ケイちゃんはどうしたいの」
「判ンない」
「俺も」

「それじゃ答えになんないじゃないの」
「……」
「私はとにかく一人にされるのが大ッ嫌いなの」
「ウン」
「でも、テツは判ってくれない」
「判ってるよ。でも俺、一人でボーッとしてたい時間もあるからさ」
「……」
「俺にはそういう時間も大切だと思ってるからさ」
「テツはその次には友だちだもんね、私はその次だもん」
「別にそういう比較してるわけじゃないし……」
「テツはさ、去年の夏休みはさ、一人でアメリカ行っちゃうし、冬休みだってずっと田舎に帰っててさ、私はお正月一人ぼっちだった」
「田舎に帰った時しか会えない友だちっているだろ？」
「明日のことだってそう、普通は誘ってくれるでしょ？　ケイちゃん、一緒に行かない？　って……」
「だって、ケイちゃんの知らない友だちだよ。そういう人の誕生パーティ行ったって面白くないだろ？」
「私は一週間月曜日から金曜日まで仕事が夜遅くまで忙しくってさ、テツに会いたいけど我慢してるのよ。たまの土曜日だから一緒に遊んでくれると思えばさ、俺は用事があるからって断られて。用事って言われればどんな大切な用事

かと思うじゃない。そしたら、友だちの誕生パーティでしょ？　そんなの……」
「大切な用事じゃないか」
「私は別にお金なんか持ってなくてもさ、私とさえ一緒に居てくれればいいとか思ってたけどさ、テツはそれすらもしてくれないんだもんね」
「……」
「テツが言うように一人でいる時間も大切だっていうのも判る、でもそれ以外は私を優先的に考えてくれてもいいと思うんだよね」
「……」
「私、ワガママ？」
「別に思わないよ、そうは」
「だよね。友だちに相談すればさ、なんでそんな男と付き合ってンだって言われる」
「ケイちゃんのまわりには優しい人ばっかりだもんな」
「なによ」
「ユーミンのCDはくれるわ、映画には連れてってくれるし。優しい男一杯いるんだったらいいじゃない」
「でも私は、その人たちのこと優先に考えたことは一度もない」
「フウン」
「じゃあ私はそういう人達と付き合った方が幸せになんの

かね」
「……ウン」
「……」
「……」
「……ムダかな、テツとこれ以上一緒に居ても」
「……かもしんない」
「――」
「だって、俺に合わせられないんだろ？」
「何を合わせンのよ、いつも一人でいることに耐えろって言うの？」
「……」
「私、今日だってさ、友だちの別荘、川口湖にあってさ、みんなで騒ぐから一緒に行かないかって誘われてたんだ。だけどテツが明日ヒマそうなこと言ってたから、私断った。行きたかったけど」
「……」
「でも、こんなふうにしか思われてなかったら、行けばよかった。今から行こうかな」
「行くなら気をつけていけよ」
「いいの？　行って」
「ダメだって言っても行くだろ」
「じゃ、もう他の男と寝てもいいんだ」
「バカ。そりゃ自分で考えろ」

「行っていいのね」
「だって、行くなったって行くだろ。関係ないんたがら」
「あ、もう関係なくなったの？」
「そういう意味じゃなくて」
「行ってほしいとか行ってほしくないとかって感情はもうないわけ」
「そういう感情はあるよ」
「どういう？」
「行ってほしくないという感情はあるよ」
「でも言わないじゃない」
「しょうがないじゃない」
「でも、いい気持ちしないでしょ？」
「ウン」
「おヘソがまっすぐ正面向いてケイちゃん行ってこいよ、気をつけてな、って言えないでしょ？」
「でも、いつもそうだよ」
「何が？」
「ケイちゃんからいつもそういう話聞かされてるから」
「なによ」
「誰それから三連のリングもらったとか、誰それから何をもらったとかさ」
「それは昔の彼氏の話じゃない」
「あ、よかったね、とは間違っても言えないだろ？」

「そんなこと言ってほしいなんて思ってないもん」
「ま、そんなに気にしてないけどさ。俺にもケイちゃんのイヤなとこがあるってこと」
「じゃあどうするの？　もういいの？」
「俺は別に今の現状に不満持ってないから」
「このまんまでケイちゃんがイヤだったやめろって言うだけね、テツは」
「努力はするけどね。どこまで出来ンのか判ンないけど」
「こういうこと、昨日や今日言い始めたことじゃないでしょ？　なるべく一緒にいたいってこと」
「ケイちゃん、ヘソ曲げ始めたら何言ったってムダだからなあ」
「ムダも何も、テツは、じゃあ友だちの方はなんとかするから俺だってケイちゃんと一緒にいたいとかって一言も言ってくれないじゃない。友だちが優先で、私がそれに合わせらなかったらもうしょうがないって、そういう言い方しかしないでしょ？　それが信じらンないだよね」
「ケイちゃんだって、俺が明日のパーティ楽しみにしてるんだったら、じゃ、気持ち良く楽しんでくれれば？　って言ってくれてもいいんじゃない？」
「勝手よ、そんなの。私、一緒に居られることよりも大事なことなんてないと思うもん、お互いに好きだったら……」

「……」
「そんなに大事なの？　自分のこと思ってる彼女より、友だちの方が」
「俺はこういうふうにしか出来ないよ」
「……」
「……」
「……もう無理ね」
「……かもね」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……もう寝る」
「……」
「それじゃ……」
「ウン」
「切るね」
「ウン」
「切るよ」
「ウン」
「なんでウンしか言わないの？」
「……」
――電話、続いて。

男――山辺哲也。二二歳。学生。
女――長谷川啓子。二二歳。ＯＬ。

「五文字」

伴一彦

電話、つながる。
「斉藤でーす」
「眠そうな声ね」
「ああ、琴美か」
「誰だと思ったの？」
「別に。今、家？」
「帰ってきたとこ」
「楽しかった？」
「つまんなかった」
「盛り上がらず？」
「そんなことないけど、健次がいないんだもん」
「俺だって行きたかったよ」
「何時まで残業してたの？」
「何時だろ。とにかく速攻帰ってきてベッドに潜り込んだとこ」
「じゃあ、合流出来なかったね」
「ウン」
「肩身狭かった。二人のデート、邪魔してるみたいで」
「ゴメンな」
「西村くんは両手に花だ、とか言って喜んでたけど」
「あいつらしいな」
「でもつまんなかった」
「今度穴埋めするからさ」

「お願いします」
「で、どうだったの、あの二人」
「もうベタベタ」
「マジ!? だって、あいつら引き合わせて二週間ぐらいだろ？ その間何回も会ってないはず……」
「だと思うでしょ？ ところが、ほとんど毎日会ってたらしいの、私たちに内緒で」
「やるねえ、西村クン」
「聞いてくれる？」
「聞いてあげる」
「なんか二人の歩くスピード遅かったのよ。私が先に行く感じになっちゃって振り返ったらさ、手、つないでンのよ」
「西村におごらせるゾ」
「そんなヒマあるの？」
「なんとか作らないとね」
「だったら私と会って」
「そりゃそうだ」
「明日は？」
「無理」
「どうして？」
「七時の新幹線で名古屋。日帰りだけど何時に帰って来れるか判ンない」

「ずっと会ってないよ」
「そうだなあ」
「ねえ、会いたい」
「うーん。忙しいんだよなあ、今週は」
「私、ヒマなの。ヒマでヒマで、死んじゃうかも知れない」
「ヒマだから会いたいわけ？」
「好きだから、会いたいの」
「おいおい、酔っぱらってンの？」
「土日も無理なの？」
「そうだなあ」
「なんとかして」
「なんとかする」
「泊まりに行ってもいい？」
「あ、それ、楽でいい」
「楽？」
「いや、土曜もちょっと会社に顔出さなくちゃいけないからさ、どっかで待ち合わせるよりいいと思ったの」
「なんだか手抜きのような気もするけど。アパートデート」
「楽しいだろ？　人の目気にしないでベタベタ出来るし……」
「エッチ」

「嫌いじゃないだろ？」
「信じらンない。そういうこと、電話で言う!?」
「ま、とにかく土曜日な」
「何食べたい？」
「まかせる」
「食べたいもの、ないの？」
「鍋がいいけど、食べ過ぎるからなあ」
「じゃあ、何にする？」
「思いつかないよ。ホント、まかせるから」
「判った」
「ふぁーッ」
「欠伸しないでよ」
「眠いよ」
「もう寝る？」
「明日早いもん」
「判った、切るね」
「ウン。じゃあな」
「ねえ……」
「何？」
「言って」
「何を」
「健次が最近言わなくなったこと」
「あ？」

「前は電話切る時必ず言ってくれてたでしょ？」
「なんか言ってたか？」
「ひらがなで五文字」
「……。“さようなら”、か？」
「違う」
「“おやすみなさい”じゃ七文字だし、“バイバイ”はカタカナで四文字だし、“じゃあな”も四文字か」
「……ホントに判ンないの？」
「判ンないよ」
「“あ”で始まって、“る”で終わる言葉」
「……」
「判った？」
「判った」
「言って」
「雨が降る」
「――」
「違うか？」
「違うでしょ!?」
「飴食べる、か」
「健次……」
「開いている」
「……」
「慌ててる」

「……」
「足が出る」
「……」
「青くなる」
「……」
「蒼褪める」
「……」
「垢抜ける」
「……」
「赤い猿。……想像すると気持ち悪ィ」
「……」
「うーん、と……他には……」
「……」
「……もしもし？」
「……」
「おーい、琴美」
「何よ。判ってるんでしょ!? どうして言ってくれないの!?」
「そんなこと、言わなくても判ってるだろ？」
「言わなきゃ判ンないじゃない」
「どうして」
「前は言っててくれたのに、どうして言わなくなったの？」

「どうしてって……」
「そう思ってないから言えないんだ」
「そんなことない」
「そうよ」
「怒るぜ」
「怒れば？」
「普通言わないだろ、付き合って二年もたてば」
「長さは関係ない。気持ちの問題よ」
「気持ちは判ってるだろ？」
「判ンない」
「ホントに言わなきゃ判ンないのか」
「……」
「どうなんだよ」
「……判ってるけど」
「だったらいいじゃないか」
「だけど、言ってほしいの。なんでそんなにもったいぶるの!?」
「恥ずかしいだろ？　電話でそういうこと言うの」
「エッチする時だって言わないじゃない、最近は」
「……」
「付き合い始めたころは言ったよ、こんなに電話早く切ろうとしなかったし」
「土曜日に会えるからいいじゃないか」

「土曜のことだってそうよ、前はいろんなとこに連れてってくれたけど、今は全然。アパートデートばっかり」
「そりゃ学生だったからだろ？　ホント社会人になると時間がないんだから」
「そういう問題じゃないでしょ？」
「そういう問題なの」
「やっぱり手抜きよ。気持ちがないのよ」
「琴美ィ、俺、態度で示してるだろ？」
「エッチが好きなだけでしょ？　私じゃなくてもいいんでしょ？」
「他の女なんか相手にしてないだろ？」
「忙しいからでしょ？」
「いい加減にしろよ。判ってるクセに絡むなよ」
「……」
「俺は言葉なんか信じない。態度で示してくれた方が嬉しいし、信じられる」
「態度を言葉にしてほしいだけなの」
「態度で充分だろ？」
「言ってくれたっていいじゃない」
「ヤダよ」
「ムキになって！」
「ムキになってンのは琴美だろ!?」
「健次でしょ!?」

「ウルサイなあ」
「もういい！　今更言ってもらったって嬉しくない」
「言わない」
「いいもん」
「じゃあな、おやすみ」
「ちょっと!?」
電話、切れる。

一〇分後。
「もしもし」
「何よ」
「今井琴美様ですか？」
「健次ィ」
「斉藤健次様からの伝言をお預かりしております」
「ふざけないで。私、怒ってンたがら」
「伝言は全部で五文字でございます」
「……」
「あ、い、し、て、る」
「……」
「以上、確かにお伝えしました」
「……バカ」

男――斉藤健次。二五歳。会社員。
女――今井琴美。二二歳。学生。

「朝帰り」

伴一彦

「もしもし」
「わ、凄い声。風邪引いたの？」
「ウン……昨日、洋服のまま寝ちゃったからな」
「……飲みに行ったんでしょ？」
「ウン」
「結局誰と飲んだの？」
「森と、長尾と、柴田かな」
「かなって、何？」
「いや、その三人」
「女の子はいなかったんだ」
「ウン」
「……何時頃まで飲んでたの？」
「部屋帰ってきたの、五時頃かな」
「ホントに五時？」
「……もうちょっと遅かったかもしれない。時計見てないからよく判ンないよ。酔っぱらってそのまま寝ちゃったから」
「ふうん」
「なんだよ、それ」
「ね、なんか私に話すことない？」
「え？　別に」
「ふうん」
「なんなんだよ、それ」

「別にィ」
「あ、それより、聞いたぞ、森から」
「熊谷くんのこと？」
「そうだよ」
「そのこと話そうと思って電話したの」
「どう話すつもりだよ。別れ話か？」
「違うわよ、何言ってンの」
「じゃあどういうことだよ」
「だから説明するって。熊谷くんと会ったのね……」
「デートしたんだろ」
「デートじゃないよ、会っただけ」
「いつだよ」
「この前の日曜日」
「この前の日曜日？」
「浩次はバイトだって言ってた」
「……あの日か」
「ウン。最初から会おうって約束してたわけじゃないの。お昼頃起きてボーッとしてたら電話掛かってきて、近くまで来たから会えないかって……」
「……」
「私、ヒマだったし、出て行ったのね。それで、お茶ご馳走になって、映画見にいったの」
「それじゃやっぱりデートじゃないか」

「結果的にね。でも、グズグズ用意して亜紀から電話かかってきたりして、熊谷くんのこと、二時間も喫茶店で待たせたのよ。浩次とのデートの時、そんなことしないじゃない」
「私は熊谷くんなんかに興味ありません、って言いたいんだな」
「それはもちろんだって」
「……」
「それで、映画見たら、御飯食べようってことになって……居酒屋に行ったの。飲みながら話してたら、恋人いるの？　って話になって……熊谷くんって私たちが付き合ってるの、知らなかったみたいなの」
「……」
「で、私はちゃんと付き合ってる人がいる、って言ったの」
「俺だってことは言わなかったんだ」
「ウン」
「どうして」
「熊谷くん、聞かなかったんだもん。具体的に。それよりも自分が言おうとすることで頭が一杯みたいで、なんか緊張して真っ赤になってるんだもん」
「……」
「そういうの見てたら、次に熊谷くんが何を言いたいか判るじゃない。私、ヤバいと思って必死にそっちに持ってかな

いように持ってかないように話したの」
「結構話、盛り上がったんだろ？」
「まあね。でもクダらないこと。『ターミネーター2』面白かったね、とかそういうこと。で……ご馳走さまって店を出て、エレベーターに乗ったら、彼、いきなりキスしてくるんだもん。ビックリしちゃった」
「――」
「もうブッ飛ばし……はしなかったけど、頭に来ちゃった。その後でももう一軒行こうなんてトボけたこと言ってたけど、放っといて帰ったわよ」
「……」
「それから何度か電話あったけど、完璧無視」
「……」
「……？」
「……」
「もしもし？」
「……ずいぶん違うな」
「何が？」
「熊谷が森に喋ったのとはさ」
「……」
「お前とずっと前からデートの約束してて、それで映画見て飲みに行って、結構盛り上がった。それでキスしたらお前も満更じゃなくて、でもその日はそこままで抑えて帰っ

た、って……」
「信じられない！　ウソよ、そんなの」
「だけど、熊谷、ニコニコしてるらしいよ、最近。お前に拒否されてたらそんなことないだろ」
「おかしいんじゃない!?　熊谷くん。よっぽど女の気持ちが判ってないのね」
「……」
「……私の言うこと、信じないの？」
「……あいつの言うことの方が真実味があった」
「ねえ、私、ちゃんと言った。全部ホントのこと言った。今までだって浩次にウソついたことないよ」
「……」
「もしもし？」
「……」
「浩次……なんで黙ってンの？」
「……考えてる」
「考えること何もないじゃない。私のこと、信じてくれれば……」
「……信じられないな」
「そうね。自分に疚しいことあると、人のこと、信じられなくなるよね」
「……どういう意味だよ」
「知ってるんだから」

「……何を」
「昨日、誰と飲んだの？」
「だから、森と長尾と柴田だって……」
「直美ちゃんもいたでしょ」
「――！」
「森くんから聞いた。さっき電話あった」
「……あいつ、喋りまくってンなあ」
「で？　二人で消えちゃったんだって？」
「……認めるよ。彼女、付き合ってる奴のことで相談あるって……森とか長尾がいると話せないからさ、あいつらお喋りだから。で、二人で別の店行ったんだ」
「それで？　ホテル行ったの？」
「――。何言ってンの」
「だって、昨日、帰らなかったでしょ？」
「帰ったよ、六時頃」
「ウソ。私、電話したもん」
「そんな朝早くか？」
「夜中から何度も。出なかったじゃない」
「留守電にして寝てたんだよ」
「浩次、帰ってきたら必ず伝言チェックするじゃない」
「酔っぱらってたから……」
「ううん。浩次、酔っぱらってもチェックする」
「――」

「でも、朝かけても二回で繋がった。伝言入ってない時は五回で繋がるんだよね」
「……」
「ホントのこと、言って。直美と……」
「何にもないって……」
「だったら言ってよ。二人で消えてどうしたの」
「だから、他の店にいって、ずっと話してた」
「今日のお昼まで？」
「ン……」
「そんなウソ、よくつくわね」
「だから……店で相談に乗ってたんだけど、彼女、急に泣き出しちゃってさ、みんなに見られちゃうし、だから店出て……」
「どこ行ったの」
「……彼女ンち」
「――！」
「誤解すンなよ、彼女とは……」
「……泊まったんだ」
「いや、ホントに明け方まで話してたんだ。で、酒飲んでるだろ？　もう、俺眠くってさ、部屋まで帰る元気もなくてちょっとだけソファで寝かしてもらったんだ」
「……」
「ホントにそれだけ。悪いけど、俺、直美ちゃんタイプじ

ゃないから」
「……タイプだったらどうなってたか判ンないってこと？」
「そういう意味じゃないよ」
「ホントに何にもないの？」
「ホントに」
「だったらどうして最初からそう言わなかったの？」
「だって……最初から直美ちゃんちに泊まった、なんて言ったら誤解するだろ？」
「……しないよ、ちゃんと話してくれたら」
「だけど、いい気持ちはしないだろ。彼氏が何にもなくても他の女ンちに泊まったって聞いたら」
「……それはそうだよ」
「だから、俺、お前に嫌な思いをさせたくないから言わなかったんだ。俺さ、本当のことでも言わない方がいいってこと、あると思うんだ」
「私は、正直に全部言ってほしい。私がつらくなるようなことでも」
「……そうか？」
「こういうことって絶対バレるじゃない。変に隠されたり誤魔化されたりすると、後で正直に言われたって信じられないよ」
「……判った。じゃあ、これからはホントのこと言うよ」

「ウン」
「実はさ……」
「……え？」
「俺、直美ちゃんと……」
「……」

加藤　浩次　二二歳。学生。
坂田　美和子　二一歳。学生。